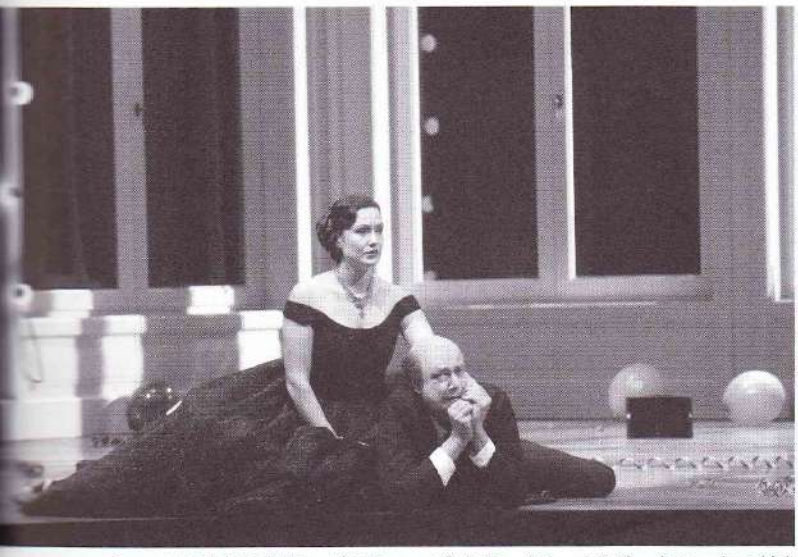
期待以上の出来に盛り上がった《ドン・パスクァーレ》

チューリヒ歌劇場前広場セクスロイテンプラッツがクリスマス・マーケットの人混みで熱を帯びていた12月8日の日曜日、歌劇場のなかでも、ドニゼッティ《ドン・パスクァーレ》初日終演後は負けずに熱く盛り上がっていた。クリストフ・ロイの演出に期待がふくらんだのだが、さらにそれを大きく上回ったものだったからだろう。細部まで読み込んだ解釈で、強引な展開部にも現代的な理由を与え、納得させる仕上がりとなり、それを実現させるキャストにも恵まれた。

題名役のヨハネス・マルティン・クレンツレは、純ドイツ的な名前に反してイタリア的な発声法を獲得しており、出すぎない演技で押しつけない笑いを取る。そして最初のアリアで観客を完全に掌握した。ノリーナ役のジュリー・フックスは、現在この歌劇場のプリマ的存在だが、彼女なしにはこの演出は成功しなかっただろう。登場のアリアからすでに、今宵の成功を決定づけていた。エルネストのミンギー・レイは終幕のノリーナとの二重唱を完璧に歌い、マラテスタのコンスタンティン・シュシャコフもイタリア人顔負けの達者な超速歌いに驚かされた。指揮のエンリケ・マッツォーラは真面目に細部まで光らせ、真面目すぎて、コケットや踊り出したくなるような高揚感が不足している部分以外は、アクセントを効果的に使って牽引力を最後まで保った。

このところ集客数が上がっているというリサイタルにも、12月5日にはクラッシミラ・ストヤノヴァが登場し、ラフマニノフの歌曲で最初から100パーセントの職人技を聴かせた。アンネリーン・レネルツ奏でるハープとのデュオは興味深い試みだが、続くR・シュトラウス「4つの最後の歌」は、なぜか説得力に欠けた。

後半はチャイコフスキー《エフゲニー・オネーギン》の主題による幻想曲で会場をロシアの風が包んだのに、〈手紙のアリア〉は予告なしにカットされ残念だった。ドヴォルジャーク《ルサルカ》のアリア、チレア《アドリアーナ・ルクヴルール》のアリアの2曲は静かな長いレガートに欠けたが、今宵のクライマックスは、突然挿入されたヴェルディ《オテロ》の〈柳の歌〉と〈アヴェ・マリア〉だった。イタリア語の母音が不適切な箇所がいくつかあったが音楽的には完璧で、最低限の演技しかしていないのに心に迫る。最後は《運命の力》のアリアだったが、ここでは重いフレージングがこなせないハープの限界を見せつけられた。彼女の歌唱力・演技力がなければ、ハープの伴奏でオペラを歌うのは難しかっただろう。



チューリヒ歌劇場《ドン・パスクァーレ》から。ノリーナを歌ったフックス(左)とドン・パスクァーレを歌ったクレンツレ(右) ©Monika Rittershaus

活気を帯びるトーンハレ

11月23日にアロンドラ・デ・ラ・パーラの指揮で聴いたチューリヒ・トーンハレ管弦楽団のスペイン・プログラムほど、理屈抜きで熱く湧いたトーンハレを初めて見た。パブロ・サインス・ビエガスをソリストに迎え、ホアキン・ロドリーゴ《アランフエス協奏曲》を、最高のロマンティシズムで披露した。休憩の後はマヌエル・デ・ファリヤ「バレエ音楽《三角帽子》」で、踊るような曲想が彼女の指揮によって実現された。

続いて25日はパトリツィア・コパチンスカヤとニコラス・ゲルバーのチャリティ・コンサートに心を打たれた。コパチンスカヤの発案で、以前デュオを組んでいたピアニストで現在は小児癌専門医であるゲルバーを、研究費を集めるため15年ぶりに舞台へ誘ったのだという。モーツァルト「ヴァイオリン・ソナタ」K14では純粋に「共に奏でる幸福感」がにじみ、涙を誘った。シューマン「ヴァイオリン・ソナタ第2番」もロマンティックな出来上がりだった。休憩後は武満徹《妖精の距離》で会場を静けさが包み込んだあと、ラヴェル《ツィガーヌ》にすべての情熱を注いだ。大人の癌に比べて症例が少なく、薬剤開発も遅れているという小児癌への支援は、チューリヒ・エレオノーレ財団 小児病院で無期限に受け付けている。

Kinderspital Zürich–Eleonorenstiftung
Steinwiesstrasse 75, 8032 Zürich
Spendenkonto: 87-51900-2 IBAN: CH 690900 0000 8705 1900 2

エキサイティングなブニアティシヴィリ姉妹

12月16日にはカティア&グヴァンスタのブニアティシヴィリ姉妹のピアノ連弾コンサートで、いつもと違った客層がトーンハレを熱く盛り上げていた。ラフマニノフ「組曲第2番」は、シューベルト「幻想曲」に変更されたが、シューベルトのCDを掲げてコンサートツアーを行ってきたカティアには合っていた。シューベルトへの深い洞察と、それを現代女性の味つけで弾き飛ばす爽快感は姉のグヴァンスタも同じだ。そしてすぐ後に演奏されたダリウス・ミヨー《スカラムーシュ》でも、姉妹共通である弱音の透明感を聴かせ、楽しそうに弾き切った。リスト《ハンガリー狂詩曲第2番》はカティア一人でも十分エキサイティングに聴かせるが、連弾になるとそのパワーは倍以上になり、譜めくりも間違えるほどのスピードとフレキシブルさが炸裂した。ガーシュウィン「《ポーギーとベス》幻想曲」では、サクソフォーンの音が聴こえるような色合いを帯び、ラヴェル《ラ・ヴァルス》ではその熱さは絶頂に達し、弾きながら立ち上がったりもして、姉妹でなければできないほどの丁々発止が小気味よかった。アンコールにピアソラを聴けたのはボーナスのような喜びだった。